

Letter for Members

【コンテンツ】

● 理事長からの挨拶	297
● 第120回記念学術大会・総会	298
● 第89回 IADR 総会 Prosthodontic Group 受賞者の声	300
● Interview	302

理事長からの挨拶

社会に信頼され会員も満足する日本補綴歯科学会を目指して



社団法人 日本補綴歯科学会
理事長 古谷野 潔

近年、学会の公益性が問われ、社会への情報発信が求められています。原点への回帰と臨床的視点の重視を軸に学会の活力を高め、質の高い学術情報の学会内での創生と社会への情報発信を促進し、社会的使命を果たします。そして、社会に信頼され会員も満足する活力の高い学会を目指します。

★原点への回帰

学会活動の原点は、専門分野に興味を持つ者が集い、研究成果を持ち寄って議論し、切磋琢磨することによって、学問の進歩に寄与することにあります。学会活動の原点である学術大会と学会誌を幅広い会員のニーズに適確に応える体制として、より多くの会員の参加を促進し、本会の活力を高めます。

★臨床的視点の重視

本会は、臨床分野の専門学会であり、臨床の進歩を通して国民の健康の向上に資することが最大の使命です。臨床研究を推進し、臨床の進歩を主導する学会を目指します。また、臨床医の本会活動への参加を促進します。

★国民に貢献する専門医制度の展開

研修施設の認定から研修カリキュラムの認定へと転換し、真に高い臨床能力を備えた専門医の養成を目指します。医療の質の担保のため、わが国の専門性の高い補綴治療を補綴歯科専門医が担う体制を目指します。

★学術的基盤の整備と発信

学会主導の臨床研究の推進、EBMに資するエビデンスの構築、EBMに基づいた補綴治療ガイドラインの作成、高度先進医療開発の支援などを推進するとともに、症型分類や補綴の新病名などの検討を進め、新時代の補綴歯科の概念の提唱を目指します。

★世界に向けた国際交流の展開

国際的コンセンサス会議あるいは国際的ワークショップの本会主導による日本開催を目指します。また、本会員の国際的学術集会への参加、招聘の機会の増大に努めます。

★透明性が高く、安定した学会運営

会員の意見を聴く機会をより多く持ち、透明性の高い学会運営に努めます。また、学会運営の効率化を図るとともに安定した学会運営を目指します。

社団法人日本補綴歯科学会 第120回記念学術大会・総会

メインテーマ

「咬合・咀嚼が創る健康長寿ー補綴歯科が発信するライフイノベーションー」

大会長 赤川 安正

学術大会の節目となる120回の記念学術大会は2011年5月20日(金)、21日(土)、22日(日)の3日間にわたり、広島市の広島国際会議場で開催されました。大会を運営させていただきました広島大学大学院医歯薬学総合研究科先端歯科補綴学研究室と助けていただいた広島大学歯学部口腔生物工学教室(主任:二川教授)を代表し、ここにお礼とご報告をいたします。

本記念大会では217の演題、2,200名を超える学術大会参加者、650名を超える懇親会参加者をいただき、無事に3日間終わりました。多大なご支援・ご協力を賜った本学会会員の皆様、共催の6学会の皆様、後援の10団体の皆様、展示・広告をいただいた64の賛助会員・非賛助会員の皆様、すべての温かいご支援に心から感謝を申し上げる次第です。

本記念大会はメインテーマを「咬合・咀嚼が創る健康長寿ー補綴歯科が発信するライフイノベーションー」とかけましたが、このテーマは、わが国の少子高齢社会の中で健康長寿を願う国民に対してきわめて重要な役割を担う「咬合と咀嚼」の重要性について、広く社会にアピールすべく、第18期日本学術会議咬合学研究連絡委員会(小林義典委員長)が2004年に提言したものです。本学会はこの提言を2005年の第113回学術大会から引き継ぎ、補綴歯科が健康長寿に果たす役割について研究を進め、国民に訴えてきましたが、本記念大会においては、さらに明確なイノベーションのメッセージを発信することを目指しました。国立長寿医療研究センター大島伸一総長は「新しい時代の医療・介護の連携」と題した特別講演の中で、「医療は治し・支える医療で地域完結型になるので、医療・介護の連携が必須になる」と説かれ、歯科医療の方向性を示唆されました。メインシンポジウム「バイオエンジニアリングが拓く補綴歯科のイノベーション」では先駆者である西村一郎教授(UCLA)のいままでの成果と展望の基調講演をいただき、本学会の将来を担う若手研究者が先端研究のデータを持ちより、達成度や問題点を議論しました。



懇親会であいさつする大会長



シンポジウム2の古谷野理事長とCarlsson名誉教授、問題提起の水口教授、佐藤教授、座長の矢谷教授



特別講演をされる国立長寿医療研究センター大島総長



研究セミナーの座長の佐々木前理事長、皆木教授、アクションプラン提示の先生方

2つの補綴学会ならではのシンポジウム、「審美領域におけるインプラント補綴のコンセンサス」では前歯インプラント補綴のコンセンサスをまとめましたし、「補綴歯科治療に潜むドグマ」ではエビデンスにもっとも通暁している Gunnar E Carlsson 名誉教授 (Göteborg 大学) が、「全部床義歯の製作法」、「治療的顎位」、「TMD マネジメント」に関する問いにアンサーされ、ドグマを排する熱い議論がされました。

今後の方向を決める2つの試みも行われました。その一つは、学際領域学会との3つのジョイントシンポジウムでした。ジョイントシンポジウム1 (日本歯科理工学会、日本歯科技工学会と共催) では「Digital Dentistry」が、ジョイントシンポジウム2 (日本口腔検査学会、日本顎口腔機能学会と共催) では「咀嚼機能検査の確立」が、ジョイントシンポジウム3 (日本老年歯科医学会、日本咀嚼学会と共催) では「介護予防へのチャレンジ」がそれぞれ取り上げられ、いずれも盛況で多くの聴衆が聞き入るなか、現状と将来を指向した議論が進みました。

もう一つの新しい試みである臨床リレーセッションでは、土日の丸2日間、「クラウンブリッジアップデート」、「欠損歯列の読み方」、「パーシャルデンチャーを活かす診断と設計」、「インプラントを用いた欠損補綴歯科治療の展開」、「インプラントスタートアップ」の5つのテーマのもと、日本有数でかつ本学会会員である19名の演者が現在の補綴歯科臨床の水準を語りましたが、「スタートアップ」を除いてあふれるばかりの聴衆をいただき、関心の高さがうかがわれました。臨床スキルアップセミナーや研究セミナーも会場はほぼ満員でした。さらに、認知症予防のための「咀嚼の意義、補綴の意義」について市民公開講座を行い、150名を超える市民を啓発しました。

わがまを聞きいれていたいただいた全員参加型の懇親会は650名を超え、会場はあふれんばかりの熱気に包ま



盛況となった会場の様子 (第1会場)



盛況となった臨床リレーセッションの様子 (第2会場)

れ、若いも若きも一堂に会して、東北のお酒や広島の味覚を堪能していただけたと思います。

一方、これらの盛況の陰で、不行き届きの点が多々ありました。たとえば、演題確認のメールがない、演題の第2希望欄がない、抄録集が遅配あるいは届かない、臨床リレーセッション2では聴衆があふれかえる、懇親会の進行がまずい、などなどです。これらの点を深く反省し、改めるべきところは改め、121回大会につなげていく所存ですので、どうかお許し下さい。

本記念大会では120回までの成果をまとめることができました。会員各位におかれましては、引き続き研究・臨床・教育に精進され、次の121回大会でさらに大きく花開くことを期待いたします。

120回記念学術大会に対する心温まるご支援に重ねて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



第89回 International Association for Dental Research (IADR) 総会 Prosthodontics Group 受賞者の声



IADR Prosthodontics Research Group Pre-Prosthetic Regenerative Science Award を受賞して

Peripheral blood mononuclear cell promotes function of osteoprogenitor cells *in vitro*
石崎 憲

Laboratory for Bone and Implant Sciences (LBIS), UCLA
東京歯科大学有床義歯補綴学講座

UCLAの小川ラボにて行っている末梢血単核球細胞の骨芽細胞への影響に関する研究で、先日2011年3月に米国サンディエゴで行われたIADRにて、栄えある学術研究賞をいただくことができました。この賞は、補綴治療に応用可能な再生医学に関する研究で、優秀で斬新な研究発表に贈られるもので、学際的な研究を推進するものでもあります。私自信、それほど若くはなく遅咲きの感がありますが、このような国際舞台にて、さらには学際的な競争の中での名誉ある結果は、これまでの努力が実ったものと、たいへんうれしく、また光栄に思っております。近年、インプラント埋入前の骨造成術などの補綴前処置の必要性が高まり、それに伴い骨補填材、骨誘導法の開発が盛んに行われています。今回われわれが使用した末梢血単核球細胞とはリンパ球と単球の総称で、日本でもその血管内皮細胞誘導能を利用した血管新生治療が開始されるなど医科領域では現在注目を集めている自己由来生体材料です。今回の発表は骨再生機能向上のための細胞治療の探索を目的として、末梢血単核球細胞共培養条件下の骨髄由来骨芽細胞様細胞の動態を観察したところ、骨芽細胞様細胞の増殖、分化能の向上が認められたというものでした。今後は小川教授が日頃から重きを置くトランスレーショナルリサーチを念頭に、

long term goalを治療法の開発とし、それに向けてさらに努力していきたいと思えます。この研究の実現にあたっては、ご寛大にも留学の機会を与えていただきました東京歯科大学、そして所属講座の櫻井 薫教授に熱く感謝いたします。



IADR 補綴グループの会長である小川隆広教授よりブラックを授与される。補綴グループビジネスミーティング受賞セレモニーにて。





IADR Prosthodontics Group

Arthur R. Frechette 2011 New Investigator Award Finalist を受賞して

萱島 浩輝

大阪大学大学院歯学研究科歯科補綴学第一教室

第 89 回 IADR 総会において上記賞に選出していただき、大変光栄に存じます。本賞は IADR 補綴学研究グループが若手研究者を顕彰する目的で設けた賞です。本賞では、提出された abstract をもとに 6 人のファイナリストが選出され、おのおのは研究内容を論文にして審査員に提出します。最終的な審査結果は、本大会における口演発表およびその論文原稿の内容から決定されます。

この度発表した研究内容は、私が大学院生として興味をもって進めているものであり、大変嬉しく思います。補綴歯科治療において、顎堤吸収を制御することは重要な課題です。われわれは、患者の負担が小さく採取が容易であり、良好な初期化効率を示す歯肉線維芽細胞から iPS 細胞を樹立しました。本研究では、この歯肉由来 iPS 細胞を用いて骨芽細胞分化誘導技術を確立すること

を目的とし、生理活性因子として、これまで臨床現場においても用いられているタンパク質より安価で安全あり、分子量の小さいなどの小分子化合物に着目しました。これらの小分子化合物が骨再生に及ぼす影響について検討を行った結果、iPS 細胞の骨芽細胞分化誘導を促進する作用を有することが明らかとなりました。臨床応用するためには、解明すべき点が多くありますが、本研究成果が新規の骨組織再生技術に貢献し、歯科医療へ応用されることを期待しております。

最後に、このような研究の機会を与えていただいている大阪大学大学院歯学研究科歯科補綴学第一教室の矢谷博文教授ならびに直接研究をご指導いただいております江草 宏先生に厚く感謝申し上げます。



IADR Prosthodontics Group

Arthur R. Frechette 2011 New Investigator Award Finalist を受賞して

福安 翔

大阪大学大学院歯学研究科歯科補綴学第一教室

米国サンディエゴにて行われた第 89 回 IADR 総会において“Arthur R. Frechette 2011 New Investigator Award Finalist”に選出され、発表をさせて頂きました。本賞は補綴学分野の若手研究者に対し表彰されるもので、応募された abstract から研究内容により 2 グループ各 3 名のファイナリストが選出され、研究内容をまとめた論文および口演発表により winner が選ばれるというものです。発表内容は、高度な顎堤吸収に対し、その抑制や喪失した骨の回復を目的に用いられる BMP のような分子量の大きいタンパクはコストや免疫的な問題等いくつかの不利益を内在しますが、その不利益を解決する目的で小分子化合物の使用が注目されていることを背景に、骨形成誘導能をもつ小分子化合物を簡便に検出

するようなスクリーニングシステムの樹立を試み、検討を行った研究です。

本研究は現在大学院生 2 年目として私が興味を持ち研究を行っている内容であり、このような世界的な学会から表彰されることは今後の励みとなりました。

この研究を通して、いまだ明らかでない骨組織形成の機序の解明や新たな創薬の分野へ貢献することで、歯科医療の一助となれば幸いです。

最後に、このような機会を与えて頂いた大阪大学大学院歯学研究科歯科補綴学第一教室の矢谷博文教授ならびに直接研究をご指導いただいております江草 宏先生に厚く感謝申し上げます。

Interview

小川隆広 UCLA 教授, 全国紙に「歯科医療の歴史にその名を刻むことになる日本人」として紹介される

本学会会員で, UCLA 歯学部補綴学講座ならびにワイントロープセンター教授である小川隆広先生の, 学術・科学に関する功績, ならびにキャリアにまつわる話しが, 2011年3月28日付け朝日新聞朝刊に掲載された。歯科界からこのような形で, 業績や人物像が紹介されるのはまれであり, 昨今の日本の歯科界にとってたいへん喜ばしいことである。また「歯科医療の歴史にその名を刻むことになる日本人」が当会員であることは, 補綴学会にとってたいへん名誉なことである。本会報ではこのことを, 歯科補綴学を越えた日本の歯科全体における画期的なニュースとして捉え, その功績をさらに詳しく紹介する目的で, 小川先生にインタビューした。

—どのような経緯で取材を受けたのですか？

米国でテニュア(終身教授位)をもった教官はそれほどいるものではありません。医科系では, 全教授のなかでも10~15%です。また, 記事にも紹介されているように, 私たち研究チームが掲げるインプラントの世界標準化といった世界的そして歴史的プロジェクトに取り組んでいる人はそういません。ましてはそれが日本人であったと, 昨年, 歯科で最も権威のある賞と言われている William J. Gies Award を受賞したこと, 以上のようなことがまず, 公には, つまりメディアの方たちの目に留まったようでした。しかし, 一番評価していただいたのは, このようなことが日本で成し遂げられ, 米国へリクルートされたわけではなく, 米国でゼロから出発し, ここまでの偉業を築きあげたことだったことだそうです。しかも, それが文武両道や和魂洋才の日本の精神に基づいているということが決定的であったとも聞いています。インタビューでは, 医療, 歯科, 科学, 学術を包括して, そしてさらにそれらを越えて, 次世代へのメッセージをお願いしますと大役を仰せつかりました。

—インプラントの世界標準化とはどういうことですか？

多くのドクターが, また一部では患者である国民が, すでにご存じのように, 現在使用されているインプラントは製造後からの時間経過によって, 本来持つべき効果



朝日新聞 3月28日朝刊, 以下のサイトにも掲載。
<http://www.asakyu.com/anohito/?id=978>

を部分的にしか発揮しておらず, このことはチタンの生物学的老化と科学的に定義されています。つまり, インプラント間で生物学的能力に差がある可能性があるのです。しかし, それらのインプラントをある波長の複数の光で処理することにより, 新鮮な状態, つまり骨結合能力を最大域まで復活させることができるのです。このことを光機能化といって, 同じく科学的に定義されています。すなわち, 光機能化の意義は, 時間, つまりインプラントの年齢によって生じていた能力を標準化できることにあるのです。さらに, この技術の独創的な点は, チタン製インプラントであれば, これまでテストしたすべてのブランドのインプラントに効果を発揮するということです。すべての患者に, 平等で最大の効果のインプラントを提供できるようになるのです。つまり, インプラントを現在よりはるかに力を押し上げて標準化できるのです。さらに, それを世界レベルで推進する, それがインプラントの世界標準化です。現在, チタンの生物学老化と光機能化は, ドイツ, スイス, オーストリアなどのヨーロッパでの教育シラバスへと公式に導入され, 学生やレジデントが学び始めました。もちろん私のいる UCLA でも複数の教育プログラムに導入されました。臨床応用, 教育すべてを含めての世界標準化です。日本

では、光機能化バイオマテリアル研究会が設立され、学術活動や情報発信を行っています。研究会によると、現時点で、光機能化技術は国内で60を超える大学や医院に導入され、いくつかの大学での教育プログラムにも導入されたとのことです。

・光機能化バイオマテリアル研究会ホームページ
<http://hikarikinou.officialwebsite.jp/>

—現在の学術活動について聞かせてください

先日行われたInternational Association for Dental Research (IADR) にて補綴の会長を完了しました。幹部として過去10年間、多くの試みを行い、実現できたことを誇りに思います。会員を増やすことから、たいへん競争の激しいIADRで、学際的シンポジウムを補綴手動で行うこと、若手の学際的研究の奨励のための学術賞や奨学金の設立など、補綴の次世代にむけた発展と歯科界における補綴プレゼンスの拡大のために多くのことができたと思っています。また、先に述べましたが、補綴およびインプラント分野から初のWilliam J. Gies Awardの受賞は、IADR本部、そして全分野の研究者からも高い評価をうけました。補綴はサイエンスであると。日本補綴歯科学会からは、佐々木先生、馬場先生に多くの力をお借りし、心より感謝しております。今回、会長のポストは、佐々木先生へと引き継ぎましたのでさらに頑張ってくださいと信じています。

日本では、口腔先端応用医科学会議AAASOM (<http://aaasom.org/default.aspx>) を設立し、サイエンスを、歯科全体として考える、学術全体と関連して考える、歯科からの発信をこめて考える、さらには世界における日本として考える目的をもったフォーラムを形成しています。是非、サイトを見ていただいて、参加して

欲しいと思っています。

—「誰にも似ていない自分へ進化」とはどういうことで すか？補綴歯科学会の若手の先生方へのメッセージは？

日本からは、歯科に関して、あまり思わしくないニュースや噂しか耳にしないのはたいへん残念です。NO.1になるのは簡単です。でもオンリーワンになるということはまったく別の次元のことなのです。NO.1とは、ある枠組みで一番ということですから、つまり、クラスや学年、地域、学会、国で一番を意味します。比較的遠いことでありません。しかし、オンリーワンとなると、舞台は全世界です。まさに世界のリーダーである、パイオニアであるということになります。これが「誰にも似ていない自分」です。エキスパートはあなた一人しかいないです。オンリーワンの業績は、多くの場合、そのための既存の枠組みや評価基準が存在しないため、自らそれらを構築していくことも含まれてくるのです。とてつもなく骨が折れます。でもそれが学術科学の醍醐味です。そうして歴史は動くのです。本来、学術科学はそうあるべき専門職なのです。でも、最後に言いたいことは、でもそれは発想と努力しだいで叶うと。そしてそうなったとき、どのような下降気流の社会でも、あなたは世界から求められる人材であると。

最後になるが、紙面の4分の1ページに大きく掲載された小川先生の記事は、われわれに夢と希望を与えたと感じるのは私だけではなかったようである。次世代へのメッセージは確実に伝わったようだ。

(東歯大 山田将博)



【投稿募集】

Letter for Members では、各支部の学術大会報告、日々の研究の報告など、会員の皆さまの投稿をお待ちしております。採否は事前にお知らせいたします。

投稿は、社団法人日本補綴歯科学会事務局 (jpr-edit01@max.odn.ne.jp) まで、メールにてお寄せください。